
総指揮官と私の事情

みーや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

総指揮官と私の事情

【Nコード】

N5849T

【作者名】

みーや

【あらすじ】

異世界トリップ後、お世話になっている彼女と一見冷静沈着な総指揮官のお話。

私の事情（前書き）

視点が『彼女』『総指揮官』とところどころ変わりますが、読みにくかつたらごめんなさい。

私の事情

「なあ、聞いた？最近、総指揮官が直に指導してるって…」

「あの人は、言葉で教えるより実戦派だからな。そして、何より妥協とか許さない性格だから、倒れるまでやるぜ。闘いの場では、本当に鬼だからな」

ここは町の一角の食堂。

昼時は、騎士達で賑わいを見せ、お店は大忙し。安いしボリューム満点でアットホームなお店だからな。

気のいい食堂のおかみさんと、尻に敷かれてる優しいおじさん夫婦で切り盛りしている。

そこに最近、一人増えたのだ。

それが、この私。

「しかし最近、総指揮官、いつにも増して威圧感漂うっていうか…」

「わかる。なんか近寄りがたい雰囲気で機嫌悪そうだな」

食事が終わって後片付けをしているテーブルの隣で、食事をしながら話している騎士達の会話が、聞くつもりはなくても耳に入ってくる。

だから、嫌でも世間の噂話や騎士団の事など耳に入ってくる。

すみません、騎士さん達。

その総指揮官というお人が、最近機嫌がよろしくないのは、きっとアレ。

そう。

私が彼の元を飛び出したからかもしれない。

★ ☆ ★

話せば長い。けど、話さなければわからない。

私は20歳の社会人…のはずだった…。この春から。

それなのに、ある日道を歩いていたら、足元に見えたのは黒いブラックホール。

その黒いブラックホールにひきずり込まれた先は、なんと異世界でした。

そして拾われた先は、先程の騎士たちの会話の中心人物である騎士団の総指揮官。

総指揮官と言うから、どんなにマッチョでヒゲボーンのおじさんかと思っていたら、逞しい体つきで整った顔をした、茶色で色素の薄い髪に、切れ長めの薄い青の瞳を持つ美青年でした。年齢も23歳という若さ。

その若さで総指揮官？と疑問に思ったが、実力では右に出る者はい

ないらしく、頭も相当きれるらしい。

騎士達の会話で聞く総指揮官の態度とは、打って変って私には優しかった。元からレディファーストなお国柄のせいか、女性に優しいのだろう。そうして、アレよアレよと、トリップ後にお世話になっていたら、何だかある時から、自分の生き方に疑問を持ち始めまして…。

ある日、総指揮官に勇気を出して宣言してみた。

「そろそろ自立を考えています！」

そうです、巣立ちの時でしょう！とも。

：瞬時に却下されました。いつものように口端を少し上げて『却下』と一言。その時点で気が付いた事。

『この人、過保護すぎる』と。

私だってもう大人なのに、屋敷から一人で出るのは危険と言い、総指揮官の休みの日には、町に一緒に買い物など、ついて来てくれたりするけれど、私の行動全てを把握したいだなんて、私はそんな子供ではないはずだ。

毎日綺麗なドレスを着て、3度のご飯だけが楽しみな生活に飽き飽きしてきたのだ。もっと外の世界を感じたいのだ。

朝、総指揮官と朝食を取り、仕事に行くのを見送る。

夜、総指揮官と夕食を取り、本日の出来事を、どれだけ暇で時間を持て余したか語る。情に訴える作戦ともいう。

昼間は暇なので、本を読んだり、庭を散歩したり、昼寝したり、昼寝したり……。

こんな生活×（かける）180日ぐらい？

仕事から帰ってきた、総指揮官と一緒に夕食時に、何度も何度も『今日も暇だった』と言っても口端を軽く上げるだけ。

実際、総指揮官には異世界トリップした身で、本来、路頭に迷うべき所、衣食住の面倒を見てもらい、かなり感謝はしている。恩人というのが一番合ってる気がする。

だけど、このままいつまでもお世話になりっぱなしという訳にもいかない。

無芸大食だし。いつまでも、屋敷に居座り続けては、きつとご迷惑だと思う。

総指揮官は、騎士団の総取りまとめをしているとだけあって、常に冷静沈着。

余計な事は一切言わないし、私の話も聞いているのか、いないのか……。その反応は薄い。その表情からは、感情があまり読みとれない。たまに口を開くと、私にもなぜか敬語を使うので、『私の事警戒してる？』って最初は思った。でも、よく考えてみれば、そりゃ、そうかー。所詮私は、得体の知れない異世界トリッパーだもんね。

そう思ったら、なんだか吹っ切れた。

最初の頃は、「私ってうるさい？」と気にして話をしないようにしていたけれど、もう自分の思うままに突き進む事にした。

だって、会話のない食事は、毎日お通夜みたいな暗さなんだもの。それに、私が黙っているように、ずっと話続けていても、総指揮官の表情は、ほぼ変化なし。

きつと聞いてはいないと思われる総指揮官相手に、一人勝手に話をしている。

だけど、総指揮官は今の所、嫌な顔はせずに、耳を傾けているかのようにも見える。その証拠に、たまに口端を持ち上げて微々たる反応を示している気がする。

いや、反応薄いから、例え嫌でも、私気付かないと思うけどね。

私はとうに会話のキャッチボールというものを、あきらめてるから大丈夫。

声の大きい独り言と認識して欲しい。

だって、しゃべらないとストレスたまるもんね。

『女の人は話す事でストレスを発散する』

昔、友達が言っていた事だけど、それは当たっていると思う。

しかし、そんな総指揮官だから、つい心配してしまう。

きつと総指揮官は迷惑でもはつきり言えないんじゃないか…。

って。

本当は、

『異世界から来て、最初は混乱して泣いていたから面倒見てやったが、いつまでこの屋敷にいるのだろう』

『毎日毎日、飽きもせずにべらべらとやかましい』

『屋敷にいるなら、生活費いれろ』

なんて、本心では思っているけれど、口に出せないだけとか…。

それに総指揮官だって、23歳というお年頃。

外見だって、遅しい体つきに、切れ長めの薄い青い瞳に、さらさらとした茶色の髪。文句のつけようがないそのお姿に、たまに見とれてしまうぐらい。そんな容姿でいて、女にもてない訳がない。

あえて言うならいつも冷静すぎて、何を考えているのかよくわからないけど。

きっと、私みたいな凡人には、想像もつかないような頭のいいコトを考えているに違いない。

私の事は、『毛色の違うアホな子』という認識かもしれない。別にそれでもかまわないけれど。

そんな総指揮官なので、きっと屋敷に招きたい女性の一人もいるかもしれないのに、私という正体不明の女が居座っていたら、上手くいくものもいかないんじゃないのか？

そんな気持ちを察して、一大決心をして屋敷を飛び出したのだ。脱、異世界ニートを目指して。

以前、総指揮官が休みの時、一緒に町を案内してくれた際に見つけた、一件の食堂。

そこで住み込みの店員を募集していた張り紙をめざとく見つけて、ずっと機会をねらっていたのだ。

しかし、ここの食堂は、騎士団の騎士達の集いの場所だったのだ。

『灯台元暗し』とはこのことさね。

言っておきますが書きおきは残してきた。そりゃー、半年程お世話になったんですもの。

礼も言わずに飛び出したなんて、礼儀を重んじるジャパニーズガールとして面目たたないし、そんな事して親の顔が見たいなんて言われると、うちのお母さん泣いちゃうよ。

総指揮官が遠征とやらで3日程留守にした隙に、チャンスとばかりにお手紙一枚残して飛び出したのだ。

「総指揮官 殿

今までお世話になりました。ちょっと世間の風に当たりたくありませんでした。

なので、落ち着いたら連絡します。心配ご無用です」

だいたいいつまでも総指揮官の元でお世話になってばかりいる訳にもいなくて、自立を目指して今まさに巣から旅立った雛の心境だ。

「本当に、ここ最近殺気だっていて、稽古をつけてもらっていると体がもたないよな…」

騎士の一人が大変お疲れの様子で昼ご飯を食べている。

しかし、総指揮官、話に聞く限りお元気そうでなによりだ。

…部下達は何だか元気じゃなさそうですが。

私は、陰ながら総指揮官のこれからの健闘を祈ろう！

そう思いながら、昼時の忙しい時間は過ぎて行く。

ああ、労働って、自立って素晴らしい！

★ ☆ ★

ふーふふふーん♪

今日の忙しさも一段落ついて、そろそろまかないの時間かなあ？と期待に胸を弾ませて鼻歌を歌っていると
不意に食堂の扉が開き、来客を告げるベルが鳴ったので条件反射で

「いらっしや…いっ……!!?」

「…いっ!!?」

お客の顔を見て、思わず声が裏返ってしまった。言っておきますが、こんな事初めだから。いつもはちゃんと笑顔で言えてるからっ！。

言われた客人も私の裏返った声を聞いて固まってる。

：いえ、違う。私の顔を見て固まっていると言った方が正しいだろう。

その人物は、私の顔を見るなり、足音荒く近寄ってきて私の両肩をいきなり押さえつけ、

「やっと見つけた！こんな所で何をしておられる！！」

「何って！？見ればわかると思いますが？店員ですよ。いらっしやいませ！」

いきなり私の両肩を掴んだ相手は総指揮官の側近であるレスターだった。

「総指揮官が必死であなたを探しておられると言うのに！」

「は？」

総指揮官が私を探している？それは、なぜ？

「とにかく無事で良かった！部下達がここの食堂で最近、『綺麗な黒髪の店員が入った』と浮足だっていたので、もしや…と思い、足を向けてみて正解でした！」

レスターは、興奮して顔を赤らめたまま、

「とにかく一度総指揮官の元に御戻り下さい！このままでは、騎士団に支障…いえ総指揮官のお体にも支障が出てしまいます！」

一方的にまくしたてるレスターに、私はなぜか冷静に

「ちょっと質問」

「はい？」

「私が、ここにいる事はまだ総指揮官には、ばれてはいない？」

「もちろんです！知っていたら、ご自分ですぐさま駆けつけるでしょう！」

そうか、了解しました。興奮しているレスターに、私は吞気に答える。

「あのー、私が総指揮官の元に戻る理由はないと思うのですが…」

この答えを聞いてレスターは元から小さい目が更に点になった。

「何をおっしゃります！」

「だって…」

だってさー、トリップして、一時保護ならわかるけど、もう半年だよ？

それに、側にいる理由がない。

もう自立の一手前だよ？

勝手に抜け出したのは悪いと思うけど、そうでもしなきゃ出てくれなかったんだもの。

だけど、落ち着いたら挨拶に行こうとも思っていたのは本当。
やはり顔を見てお礼を言わなければ。だけど、今はまだその時ではない。

「戻って下さい！お願いします！」

「ダメです」

「そこを何とか！」

「嫌です」

渋る私と、レスターとの間で押し問答が繰り返される。

総指揮官と私の事情

「そうか………彼女が……」

「はい！はいいい！！！！本当に、本当に！昨日までここに居たのです！働いていたのですっ！」

長年の部下で側近であるレスターは、涙目になりながら町の一角の食堂で必死に弁解をする。

今日の早朝、レスターからの一報を聞き、高鳴る気持ちを抑えつけ、すぐさま駆けつけて来たら、すでに食堂の娘は昨日付けで店を辞めたとのこと。

自分でも驚くぐらいに、気持ちが重く、暗くなる。期待した分だけ余計に……だ。

しかし、ここの食堂で働いていたのか……。

ここの食堂は、騎士達の噂で聞いた事がある。値段の割に量もあり、味もなかなかの物だ、と。

しかし、こんな近場にいたとは……。もっと早くに足を運んでいれば……。と思うと悔やんでも悔やみきれない。

古いけれど、掃除の行きとどいた清潔な店内を見渡す。木で出来た店内は、あたたかみのある造りで、テーブルに並べられたランチマ

ットなどは、すべて手作りであろう。家庭の温かみの感じられるような食堂だ。

ここで彼女は、あの屈託ない笑顔を客に振りまき、客の何人かに微笑みかけたのだろうか。

しばらく、彼女がいたという店内を隅々まで眺めていると、側近であるレスターが弁解を続ける。

「本当に昨日はこの食堂にいたのです！」

「……………そうか」

「はいっ！黒い髪を一つに束ねて、白いエプロンをして自分に『いらっしゃいませ』と言ったのです！確かにここにいたのです！」

「……………」

思わず、目を細め、レスターと目があうと、先程まで興奮して赤かったレスターの顔色は、一瞬にして青くなった。まるで『しまった』とでも言うように。

頭の中で、レスターから聞いた彼女の様子を想像する。

白い肌に、長いまつげに大きく輝く黒い瞳。

くるくる変わる表情に、笑うとえくぼの出来る右頬。

気転がきき、少し早い口調で次から次へと言葉を紡ぎ出すあの小さく赤い唇。

そんな彼女が、いくら客とは言え、他の男性の相手をしていたかと思うと、心中は穏やかではられない。

『何事にも動じない』そう人からよく噂されている自分は、偽りだつたと自覚する。

なぜ、彼女が自分の元から、急にいなくなったのか、彼女が去ってからは自問自答の日々だ。

彼女と取る毎朝の朝食は、明るい一日の始まりを意味していた。

朝は苦手なのか、まだ半分睡眠から目覚めていないような顔をして、テーブルについていた。

そうして、屋敷から出る際は、必ず見送ってくれていた。

自分は、毎朝見送られるたびに毎回思っていた。

―今日も業務を終えたら早く帰ってこよう、と。

夕食は、毎日、今日一日の出来事をずっと話してくれる。

『暇だったので、昼寝をしすぎて夜は眠れそうにありません』

『暇だったので、庭で木に登ってみたら降りれなくなってそこで数時間過ごしました』

『暇だったので、図書館で借りた本を読んでいたら、何時の間にかヨダレをつけてしまいました』

などと、一日の行動を面白おかしく報告してくれる。

そんな嬉々として日常の出来事を自分に話してくれる彼女を愛しく思わないはずがない。

現に、頬がゆるみ、口端はあがりっぱなしで、しまりのない顔を始終していたという自覚が自分にはある。

その声も、話すしぐさも可愛らしくて、一日の疲れも忘れる程、毎日くるくる変わる表情を飽きもせずに眺めていた。

本来、自分はその立場ゆえあまり感情が表に出る事はない。

そんな自分が彼女の前では、始終穏やかな顔をしていたと思う。

もしや、そんな自分をだらしなく思い、呆れはて、屋敷を出たのだろうか。

あれから毎日考えている。

総指揮官という立場から、ただ指示を明確に伝える事を必要としていた。

あまり多く余計な事を口にすると、部下が混乱するからだ。

彼女に、気のきいた言葉の一つでもかけてやれば良かったのだろうが、自分は彼女が話している姿を見つめるのが好きだったのだ。

自分の周りにいる貴族の娘達は、大人しく口数が極端に少ない。

それだから、なおさら彼女のおしゃべりが新鮮に感じられて、自分は毎日眩しく感じていた。

3日間！。

どれだけ、遠征中のあの3日間を長く感じていたのか他の誰も理解はできない。

遠征からはやる気持ちを抑え、帰宅したところ、残されていたのは、一通の手紙。

そうして、自分に残されたのは喪失感と自問自答の日々。

「……………帰るぞ、レスタ―」

「!はっ!はい」

「……………帰ったら今日の稽古は俺がつけよう」

「!は…!はい!」

彼女がいないこの場所に、長居は無用だとばかりに踵を返す。レスタ―も同様に後に続く。

早く帰り、このみっともなく、気落ちした顔を引き締める為に、今、自分に出来るのは己を鍛える稽古だけだ。

――――

レスターは彼女を見つけた時、無理矢理にでも保護するべきだったと、稽古の後、薄れゆく意識の中で死ぬほど後悔した。

――――

あの日、食堂にやって来た総指揮官の側近のレスターとの会話を聞いていた食堂のおかみさんは、何か勘違いをしたらしく、レスターを、しつこい私のファンと認識したらしい。

いや… それ…ちょ…違…

と口を開く前に

「いいんだよ！あんたは、あの男から逃げて来たんだろ！まったくしつこい男は最悪さね！

あんたは顔も可愛いから、男どもに狙われやすいんだろうけど、女の子なんだから気をつけないと！」

と怒ってくれ、

「じゃあ明日から、あの男のほとぼりが冷めるまで、うちの食堂じやなくて、隣町のうちの姉の食堂に手伝いにおいき！」

勘違いしたおばさんに事情を一から説明しようと思って口を開きかけたが、

「さあさあ！善は急げだよ！今日中に、荷物持って姉のところに移動だよ！私が一緒に行って話をつけてやるから！」

いや… 違う… まいったなあ…

事情を説明しようにも、熱くなり、心配してくれるおかみさんを見ていると、口を挟む隙がない。

食堂のおかみさんは困った顔した私を見て、親切にっこり微笑むと、

「ああ！またあの、しつこい男が来たら、あんたの事は辞めたって言ってやるよ！」

……まあ、いつか。

レスターには悪いけど、せつかなのでおばさんの好意を受ける事にした。

ごめん、レスター。ストーカー認定されちゃったね。

しかし、レスターは、私に『総指揮官が探してる』って言っていたのがちよつと気にかかる。

やっぱり、お別れの挨拶は本人を前にしてだよねー。

手紙一枚だけで、礼を済ませた私に怒っているとか…？

総指揮官は、冷静沈着。

自分の事などベラベラとしゃべらないし、余計なおしゃべりもしない。

もちろん、会話のキャッチボールなどない。

こっちが一方的に、ボールを投げつけているような感じなのだ。

最初の方はいろいろ質問していたが、返ってくる返事が必要最低限の台詞なので、きっと総指揮官も私のアホさ加減に呆れていたに違いない。けど、根がレディファーストだから、私みたいなのでも、お義理で毎日相手をしてくれていたのだと思う。

そのうち、総指揮官に話かけているようで、一人でしゃべるのが癖になっていた。

もう総指揮官の反応は薄い。そりやもう、薄い減塩スープのような反応なので、こっちも総指揮官の反応など気にしなくなり、好き勝手に一人で話している毎日だった。話の内容も、実にどうでもいい。相変わらずの反応の薄さなので、きっと総指揮官も私の話など、どうでもいいに違いない。きっと私の事など興味がない。

『今日も寒い気がする、総指揮官の視線。ひえゝ山』

オヤジギャグ的つつこみを心の中で入れつつも、おしゃべりはやめなかった。

けど、そんな総指揮官でも、一つ気になっている事がある。

それは、彼はとても眠りが浅いらしく、あまり寝付けない人らしい。深夜遅くまで部屋の明かりはついていて、早朝は、日の出と共に起きるらしい。

そんなに睡眠不足だなんて、健康に悪いだろうに…と思って心配し

ていたら、なぜか、真っ直ぐに見つめられて、そのまま手を握られた。

なぜ、ここで手？

疑問に思いつつも、しばらく手を握られたまま、私はおしゃべりをやめなかった。そうしたら総指揮官が珍しく眠そうに、切れ長めの瞳が少し閉じそうな様子になった。

そこで、おや？と思った私は、そのまま少し休むように勧めたら、総指揮官はソファに移動して、横になった。

そこで『おやすみなさい』と思い、手を離そうと試みたが、どんなに力を入れて振り払っても総指揮官の手は離れない。

：握らせてろ、って事ですかい。

勝手にそう解釈した私は、そのままソファで横になった総指揮官に手を握られたまま、またおしゃべりを再開した。

そうしていると、総指揮官は、安心したかのような無防備な顔で、眠りについた。

その寝顔を見ていると、日頃の無表情がなぜか、無邪気な子供のように見え可愛らしくも思えた。

それから、毎晩夕食後、ソファで手を握られるのが日課になった。そうして私のおしゃべりと。

おしゃべりしては、眠れないだろうと、私なりに気を使って口を閉じたのだが、総指揮官はじっと私を見つめて無言の圧力をかけて来た。『ああ、しゃべれって事ね』と勝手に解釈して、私はまた

おしゃべりを再開した。

しかし、おしゃべりをしているほうが眠れるなんて、つくづく総指揮官の考えている事はわからない。

そういえば、あの人は、あれから眠れているのだろうか？

ふと気になった。

総指揮官と私の事情 それから

彼女が屋敷を出て、あれから一カ月。

時間がある時には、町に行き、それとなく探して歩いては、時には人に尋ねてみたり。

けれども総指揮官という立場上、業務をおろそかには出来ない。そんな自分の立場をはがゆく感じながらも毎日を過ごしていた。

今日も自室に籠もり、一人考える。

もちろん、考えるのは一カ月も前から同じ事ばかりだ。

何度も何度も思いかえしてみても、彼女は今、ここにはいない。

あの日。

赤く小さい唇から紡がれる言葉を聞いていたら、不意に愛しさがこみあげてきて、自分は勇気を振り絞って、その白く小さな手をそつと握った。

男の手とは違う、柔らかい肌に、小さく細い指。力加減が微妙にわからなくて、どのくらい力を入れていいのか困惑した。最初はびっくりした様子で驚いた顔をしていたので、自分はそのまま振り払われるのも覚悟をしたが、彼女は黙って手を握られるままにしてくれた。そうして続く、耳に心地よい彼女のおしゃべりと。

心が落ち着いてくる時間。

自分は、彼女の手に触れ、彼女の優しい声を聞きながら眠りに入る時間が安らぎ、とても満ち足りていた。まるで子守唄のように耳に

入ってくる彼女の優しい声と、手に感じるのは、小さいけれど、温かなぬくもり。

すべてが安心できたのにー。

もしや、彼女は本当は嫌だったのかもしれない。いきなり触れてきた自分に嫌悪感を感じたのかもしれない。

それならば、この屋敷を飛び出したのも納得がいくー。
こう考えていると、自然と眉間に皺が寄っていくのを自分で自覚している。

思わず険しい顔つきになっていた瞬間、勢いよく扉がノックされ、その音の大きさに顔をしかめる。

「…入れ」

考えにふけていた所なので、邪魔されて少々、機嫌が悪い。

しかし、扉を開けて部屋に入ってきた人物に驚き、目を見張り、一瞬思考が停止する。

部屋に入ってきた人物とは、たった今まで自分を悩ませていた彼女だった。

愛らしい唇に、大きく見開いた瞳、元氣そうに微笑んで自分を見て
いる。

これは夢か幻かと、自分はしばらく動けないでいた。

約一カ月ぶりに見る彼女は、変わっていないく、白い肌に上氣した頬。
その全てが、自分の視線を奪う。

「あー、お久しぶりです」

「……」

彼女が話す、これは夢じゃない。あまりの喜びに、言葉すら出ない
自分がいる。

「その説は、大変お世話になりました」

彼女は、礼儀正しくも深々と頭を下げる。自分は動く事も出来ずに、
そんな彼女の行動を見つめていた。微動だにしない自分をたいして
気にした風もなく、彼女は続ける。

「あのですねー…」

そこまで言うとは彼女は、持っていた大きい紙袋をあけて、何やら大
きい物体を取りだして自分に差し出す。

「これは、総指揮官に贈り物です」

「……………」

自信満々に胸をはって堂々としている彼女は、淡い桃色の何らかの大きく柔らかそうな物体を両手に持ち、自分に差し出す。

「なかなか良いのが見つからなくてやっと見つけました！それで今までお世話になったお礼を！と思い、やっと持って来る事が出来ました！」

「……………」

この贈り物の意味を考えて、黙って見つめていた自分に彼女は、説明を続ける。

「これは、抱き枕です！」

その淡い桃色の物体が枕だという事を認識するのに時間がかかった自分に彼女は尚も続ける。

「しかもウサギの形です！」

誇らしそうに鼻の穴を膨らませつつ興奮ぎみに言う彼女は、

「なぜウサギかって言うと、動物セラピー効果を期待です！」

「……………」

「そしてこの枕には、安眠を誘うポップリが入っているので、これでごっすり眠れますよ！」

その枕を無言で見つめるうちに、自分はある重要な事に気付いたのだ。

もしや彼女は日々睡眠の足りない自分を心配し、何か手立てはないかと思案した挙句、屋敷を飛び出して行ったのか。

そうして自分のために、一カ月もかけて探してくれたというのか。

この安眠を誘う枕とやらをー。

その衝撃の事実にとどり着くと、彼女に笑いかけたくても笑いかけられない。
むしろその笑顔すら直視出来ない。

あまりに嬉しくて。

彼女が自分の元に戻って来てくれたこの喜び、心が歓喜に震える。
安眠のための枕と彼女は言うが、彼女の存在こそが自分にとっても安眠へとつながる存在だ。

対する彼女は、枕を両手で差しだしたまま、微動だにしない自分の様子を不思議そうに見つめ、首をかしげている。

彼女が首をかしげたので、その黒い髪が肩からすべりおちる。唇を少し開け、不思議そうに自分を見つめる。

そんな些細な表情の、全てが愛しくてたまらなくなり、胸の奥が苦しくなる。

「……自分に……安眠を…」

愛しい気持ちが抑えきれずに、思わず枕を抱えていた彼女ごと、抱きしめる。

自分の為に屋敷を抜け出し、慣れない労働をして賃金を稼ぎ、贈り物を探して来てくれた。

そうして今、ここに戻って来てくれた。

そんな彼女の優しさに触れ、心が歓喜の声を上げる。

自分は、騎士として、そんな彼女を一生かけて守ろうと心に誓う。

抱きしめる前の彼女は、驚きに目を見開いていた。

★ ☆ ★

そして、私は。

初お給料を手に入れて、喜びをかみしめながら、買い物をしていたら、えらく可愛い枕を見つけたので、総指揮官に今までのお礼の品物として購入し、届けただけなのに、いたく感謝され……たのかどうかは、相変わらずの反応の薄さなのでわからなかったが、急に枕に抱きついてきたので、きつと喜んでいたはずだ。

私という存在もついでに抱きしめてしまいうぐらいに、枕の事を喜んでくれたと思ってもいいのかな。

あの薄い青の切れ長めの瞳に真正面から見つめられ、細く見えても意外に逞しい体つきの総指揮官に抱きしめられて、ドキドキしてしまったのも事実だ。

そうしてその後、この屋敷から出してもらえなくなったのもまた事実だ。

食堂の仕事もあるというのに。

なぜだ？

私の働く食堂に、お昼になると側近も連れずに、ほぼ毎日一人でやってくるので、今では三食毎日総指揮官の顔を見ていることになる。

なぜこうなった？

その代わりに、若い騎士団の人達は、まったくもって、やって来なくなっただけ。

あれ？

朝は共に屋敷を出て、食堂に私を送ってから、ご自分の業務へと向かう総指揮官。
帰りは食堂まで迎えに来てくれて、なぜか屋敷まで一緒に帰ってる、総指揮官と。

あれ？

その後はいつもの夕食を取る。

ただ以前と違うのは、私のおしゃべりの内容が『今日も暇だった』的な内容ではなくなった事。

食堂のおかみさん夫婦の事、お客さんのお話など、その日の仕事の内容だ。まあ、相変わらず総指揮官の反応は減塩スープなのは変わってないけれど。

ただ、以前よりは、口端を上げる事が多くなった：気がする。その口端を上げているのも、笑っているのか、アホな子を憐れnderのか、意図は掴めないけれど、まあ、私は自分が楽しければそれでいいのだ。

そうして、その後は私のあげたウサギの抱き枕を頭に敷きながら、私の手を握り、聞いているのかいないのかわからない私のおしゃべりをバックミュージックに、また今夜も眠りに入るのだろう。

そうして、総指揮官の無防備な寝顔を見ながら、また今夜も私は思うのだ。

やっぱり総指揮官の思考回路はわからない、と。

総指揮官の遠征事情

総指揮官が、遠征に出掛けた。予定は本日から1ヵ月ぐらい？らしい。

やっほーい！

とは思わないけど、何をしようかちょっとワクワクしてしまう自分もいる。

働いている食堂のおかみさんに頼んで、しばらく泊めてもらおうかなあ。

だって最初は、住み込み予定だったんだもの！

：今では、なぜかのお屋敷通いですが。しかも送迎付きですが。：なぜだろう？

遠征中は、町に一人で買い物なんて行っちゃったりしてー！

そして、美味しいスイーツでも探してみようかなー！

あとアクセサリーも欲しいなあー！

いや、決して遠征が楽しみな訳ではないのよ。そうよ、楽しみではないのよ。もごもごごご…。

★ ☆ ★

本日から、友好国である隣国カルパールまでの遠征が急遽決まった。業務なので、渋る訳にも行かず部下達を引き連れて目的地へと向かう。

カルパールへと向かう道中、考える事は一つ。

彼女は今何をしているのだろうか。

本来なら、この時間は彼女の働く食堂で昼食を取っていたはずだ。
今日も元気に働いているのだろうか。

急遽決まった遠征だったので、あまり挨拶もせずに出てきた自分を
彼女は責めるだろうか。

遠征中、自国に遠征の様子を定期的に連絡する報告書の提出を義務
づけられているので、その足で部下に彼女の様子を見てくるように
ことづける。

そうして国への報告書と、彼女への手紙を部下に託す。

★ ☆ ★

本日、総指揮官の部下のレスターが、私宛に総指揮官からの手紙を
届けてくれた。

こっちの世界に来てから、人から手紙を貰うなんて初めてで、嬉し
くてわくわくした。

『隣国カルパールは由緒正しき大国であり、鉄鋼などの産物に優れ、
その歴史は長く大変興味深いものがあり、我が国とも長きにあたり
友好国にある。今回の遠征の目的はお互いの騎士団力の向上の為の
遠征である。今朝カルパール大国の、その広大さで有名なグルゴニ
ーの丘に着き、カルパール国の指揮団との交流を潤滑に行う為、自
分は自国の陣営の配置を思案し…』

……。

…開けて読んだ瞬間、わくわくした自分がアホだったと思い知る。

これは、私に一体どうしろというのだろう。しかも何だか丁寧な字で便箋にびっちり3枚も綴られてるが、もしや騎士団の記録でもつけろという事なのだろうか。

それとも、私を騎士団に勧誘しているつもりなの？あの総指揮官殿は。

まったく理解に苦しむ手紙を貰い、どうしたものかと途方にくれる。

「レスター…」

「はい！」

「こっちの手紙が国への報告書ではないですよ？まさかとは思いますが、間違っていないですか？」

「いえ！報告書は先に届けてきました！報告書は1枚ですから！」

国へより、私への報告書の方が長いんかい！

総指揮官殿は、これを私にどうしろとーーーーー！

加えて側近であり、この手紙を急いで持ってきたレスターの、なん

だか何かを期待するようなすがらのようなオーラを感じて、私はレスターの瞳を真っ直ぐに見つめ返せない。

…だけど、まあいいか。

「レスター、わざわざありがとうございます」

「はい！それでお返事はどういたしましょうか！」

返事と言われても、何をどう書けというのか私にはわからない。

「…ちょっと保留でお願いします…」

「……そうですか…」

何だか、レスターの落ち込んだ様子に申し訳なく思うけど、どんな返事を書いていいのかわからない。

グレゴニーの丘ですか。丘と言えばピクニックぐらいしか思いつかない呑気な私に、どんな内容の返事を書けばいいのだろうか？

★ ☆ ★

5日後。

またレスターがお屋敷にやって来た。そうして私に手渡したのは総指揮官からの報告書…いや、手紙…なのか？これは。

すぐさま内容を確認したら、またため息の出るような理解に苦しむ内容だった。

しかも便箋7枚に増えてるし。新手の嫌がらせなのかしら。それとも本気で騎士団にお誘いなのかしら。いつもの事だが、総指揮官は理解に苦しむ。

「…レスター」

期待に満ちた目で見つめるレスターに申し訳ないけど、今回のお返事も保留と伝える。

レスターは悲壮感を漂わせ、遠征先に帰って行った。

★ ☆ ★

10日後

またレスターがやって来た。もう何も言わなくてもわかる。前回よりも分厚い封筒を手渡され、自然に涙目になる私がいる。

「…レスター」

「はい！」

「今日は…」

保留です、と伝えようとしたところ、レスターも何だか目で訴えて涙目になっている気がする。

そんなレスターに同情してしまい、つい、

「…明日、お仕事お休みなので、返事は明日書きます…」

言ってしまった。私のバカ！

レスターは喜んで5日後に來ると言って去って行つた。

私のタイムリミットはあと5日。さあどうする？返事はどうする？
内容は？

★ ☆ ★

15日後

「総指揮官殿！お返事です！預かってまいりました！」

部下のレスターが、目を輝かせ嬉しそうに息を切らせて自分の元へと駆け寄る。

「総指揮官殿のお手紙、大変喜んでました！」

「……そうか」

「ええ！最後は涙ぐんでまで大変感動してましたから！」

レスターと別れ、一人になり、手紙の封を開けると、彼女の丸い字が便箋から飛び出してくる。心が穏やかになる時間。

手紙の内容は、特に変わった様子はなく、どうやら彼女は元気そうだ。その様子に安心し、口端が自然に上がる。

彼女に出していた手紙もどんな内容を書けばいいのか最初は悩み、

とりあえず近況報告になっていたのだが、実際、返事を期待して手紙を書いていた訳ではなく、彼女の事を考えるとつい筆が進んでしまっていたのだ。

しかし、こうやって返事をもらえるとは予想外で、それだけに感激もひとしおだ。
胸にこみ上げる何かが来る。

彼女の丸い字を指でなぞりながら、レスターの言葉を信じ、これからも手紙を送り続けようと自分の中で誓いを立てた。

★ ☆ ★

20日後。

「今日も総指揮官からのお手紙を預かって参りました！」

「げ」

つい心の声が言葉に出てしまった私は慌てて口を押さえる。レスターは、一瞬不思議そうな顔をしたが、聞こえてなかったみたい。ホッ。

レスターから受け取る封筒が日に日に重みを増して行くのは気のせいではないはずだ。

「…一つ、聞いてもいいですか？」

「はい！」

「総指揮官殿はいつ遠征からお帰りなのでしょうか…?」

なんだか、このままでは文通メイトになりそうなので、いつそ帰って来て欲しい。

私にはあの手紙の返事を書くには荷が重すぎる。

私の問いを聞いたレスターの瞳は輝いた瞳をしていた。

★ ☆ ★

「…ご苦労だったな」

「いいえ!とんでもありません!それに今日はお返事こそ保留でしたが、ご質問されました!」

「…質問とは?」

「総指揮官殿の遠征がいつ頃終わって帰ってくるのか、待ちきれない様子でした!」

★ ☆ ★

いつもの総指揮官定期便を受け取って封を開けてその手紙に目を通す。

しかも、今回は私の出した返事の誤字脱字の指摘までご丁寧に赤ペ

ンで印されていて、やんわり指摘されている。

何これ、どこの通信教育。

私は盛大なため息をつく。

しかし、手紙の内容を見ると総指揮官は相変わらずだ。相変わらずだと言う事はお元気なのだろう。

淡々と遠征の様子を語っているが、文章レベルが高度なので残念ながら7割程しか理解できない。

まあ、この手紙も総指揮官らしいといえば総指揮官らしい。

しかし、私を気遣う手紙の意味だけは伝わって来た。一言もそんな事は書いてなかったけれども。

「ああ、総指揮官…早く帰ってこないかな…」

自室で、ペンを片手に便箋とにらめっこして返事に悩みながら、心からそう思う。

総指揮官の遠征事情（後書き）

レスターは総指揮官に絶大なる信頼を寄せている子犬ちゃんのような人です。

総指揮官の帰宅事情

総指揮官が30日間の遠征から、ついに帰ってくるらしい。

長かった… 本当に長かった……！

あの手紙の長さはマジで半端ネエ！オラ、こんな長い通信教育びっくりダァ！な長さだった。

きっと自分がいない間に、だらだら自堕落な生活を送ると予想できる私に対する活！だったのかもしれない。

しかし、私はここで重要な事に気付いた。

総指揮官の遠征中に、楽しみにしていた計画の半分もこなしていない、という事を。

休みの日には一人でスイーツを探しにいくとか、お買い物に行くとか、そんな計画を全てパーにした総指揮官からの通信教育的手紙。あの返事に頭を悩ませる事半日で、休みの日は勉強していたも一緒だ。

だから、私はここに誓う！

私の今日のお休みは、今話題のスイーツのお店に行くと！

目標のお店は『ハニーズ・ビー』という焼き菓子専門店だ。

なんでも、名物の『ハニーフラン』というお菓子は、ワッフルのよな形で外はカリカリ、中はもっふもっふの柔らかくい生地に、トッピングはご自由に！お好みで！スタイルで、アトレアという花の蜜をかけて食べたり、クリームを挟んで食べるらしい。

噂で聞いた瞬間から、私も食べたい、食べたい、何ソレ、想像するだけでヨダレが出ちゃう。

甘いお菓子は私の幸福の元、笑顔のタネ、そして肥満への第一歩。
：けど、食べちゃうもんね。

総指揮官は、何だかとっても過保護なので、私が一人で出歩くのをあまり良い顔をしない。

だから、行くなら今のうち。

鬼の居ぬ間になんとやら！とは昔の人はよく言った。

いや、別に総指揮官を鬼と思ってる訳ではないが、あわわわわ。

ハニーズ・ビーのお店の存在を知った瞬間から、心は虜になっていて、

あまりにも食べたくて総指揮官の通信教育のお返事にも熱く語って書いた程だ。

どんなに、ハニーフランが食べたいのかを赤裸々に、まだ見た事もないハニーフランの君を想像イラスト付きで総指揮官に送付したぐらい。下手くそなイラストだろうが、私の熱意だけは伝わったと思う。

昔から、食べ物には尋常じゃない熱意を燃やす自分がいる。

『その熱意を他の事に費やせばいいのに』

周囲の人間によく言われたが、自分でもそう思う。

★
☆

そうしてたどり着いた先のハニーズ・ビーのお店は大盛況だった。店内は、わりと広めで買ってすぐ食べる事の出来るスペースもあったので、もちろん私は店内で食べる事を決めた。だって、こんな美味しそうな食べ物、すぐ味わいたいじゃない？ねえ？

飲み物と一緒に、憧れていたハニーフランを購入して、わくわくしながら空いている席を探して腰かける。

腰をかけて一息ついて、さあ食べようと思って口を開けた時、店内の入り口のベルが鳴り響き、来客を告げる。

この店は大繁盛なので、先程からひっきりなしにベルが鳴っている。たいして気にもせずに、入口の扉の方を向いた私は、そこにいるはずのない人物を見つけて我が目を疑う。

遅しい体つきに、切れ長目の蒼い瞳は鋭く輝き、

甘い店内にそぐわぬ空気を醸し出しながら、茶色の髪をなびかせ、店内の様子をうかがっている。

その人物は、甘い香りの漂う店内の雰囲気とは真逆の空気を身にまといたたずんでいた。

その人物こそ、約30日ぶりに見る、

通信教育の指導者：

違った、総指揮官殿だった。

なんでいるんだあああ！

甘い店内に紛れ込んだ、その人物は明らかに異彩を放ち浮いていた。

★ ☆ ★

総指揮官に声をかけた。もちろん私から。

何だか、買い食いがばれてしまった小学生のような気分になったけれど、べっ、別に悪い事なんてしてないし？ 正々堂々と声をかけたわ。

「おっ：おかえりなさい総指揮官殿」

正々堂々と言いつつ、かんでしまった自分が憎い。

私の声かけに総指揮官は、眉を一つあげて、たいして驚かなかった様子を見ると、店内に入ってきた時点で私の存在に気付いていたのだろう。さすが、総指揮官とだけあって抜かりのない観察力だ。

思わぬ店内での遭遇に驚いたが、立ち話も何なので、総指揮官に自分の席の場所を教え、『よろしければ一緒に：』と、声をかけた。

★ ☆

しばらくすると、私の目の前の席に総指揮官がコーヒート、ハニーフランを持ってやってきた。

思いもよらないこの場所で出会ったという事は、総指揮官はまさかのハニーフランを食べたいが為にここまで来たの？

それとも私の手紙に触発されて、一人で甘い香りの漂うこのお店までやってきたのかしら？

まさかの総指揮官殿甘党説に、何だか微笑ましく思ってしまう。
総指揮官は、甘い物なんて食べなそうだが、人は見かけによらない。
遠征から帰ってくるなり一人で真っ直ぐにこのお店に来るなんて、
かなりの通とみた！

一人でにやけながら、購入したばかりのハニーフランを口に入れる。

「！」

口に入れた瞬間、口の中に甘さが広がる。

「すごい美味しい！来て良かった〜！外は、サクサクしていて中は
ふわふわで柔らかくて、甘いんだけど、しつこくない甘さ。これは
何個でも食べれそうだわ！お持ち帰り出来るかな？せっかくここま
で来たんだもの！そうだわ、ちょっと聞いてみよう！

スタッフ〜。スタッフ〜」

私は一人で笑いながら続ける。

「あはは。これ、私が元の世界にいた時、流行っていた笑いのネタ
なんだけどなあ。ってか、通じる訳ないか〜。しかし本当に美味し
い。何個でも食べれそう。帰りにお持ち帰り出来るか店員さんに聞
いてみなければ！」

一人で笑ったり、しゃべったり、食べたりと、私は相変わらず忙し
い。

そして総指揮官は、いつものように無口で無表情だ。こちらにも相変
わらず。

だけど、そんなの慣れっこなので、私はいつもと変わらず一人で話を続ける。

「総指揮官が留守の間、アデルのお家で子猫が3匹産まれたので見に行きました」

アデルとは、総指揮官のお屋敷に勤めているメイドさんで、私達は年も近いし仲良しなのだ。

「その子猫が、もう小さくて可愛くて！お母さん猫の側でぐっすり眠ってる姿なんて、見ているこっちがとろけそうな程微笑ましくて！」

アデルの家の子猫がどんなに小さくて可愛らしいかを一通り熱弁した後、
そこで前々から疑問に思っていた事をふと思い出し、総指揮官に尋ねてみる。

「そういえば、総指揮官のご両親は？」

「いる」

……そりゃねえ、ご両親が『いる』ってのはわかるさ。

総指揮官だって、木の股から生まれたとか、コウノトリが運んで来たとか、または桃の中に入って川から流れてきた訳ではないでしように。

私が聞きたいのは、そんな事ではなくて、ご両親は健在で？とか、どちらにお住まいで？とか。

そこから会話に華が咲くかとも思ったけど、まあいいや。いつもの事だし。

食べるに没頭しよう。

★ ☆ ★

遠征中、彼女から手紙が届く。

遠征中も恒例となってきた手紙のやり取りは、精神的肉体的にも疲れた時に大いに癒された。

何度読み返した事か。

遠征に出るのも悪くないー。

いや、本当は顔を見ないと不安なのだが。

今回は例外でめったにない長い遠征になったが、そう長くない期間なら遠征に出るのも悪くないかもしれない。

彼女とこうやって手紙という手段で繋がってられるのならー。

それはそうと、最近の彼女の手紙には、気になる一文があった。

『ハニーズ・ビーで売られているハニーフランが食べたいです。』

何だか、丁寧に絵まで添えられていて、その手紙を開封した瞬間、これは、そのハニーフランを手土産として持ち帰って来て欲しいという

彼女の願いだという意味で受け取った。

自分は、ただならぬ使命感を感じて、2日程予定より早く遠征から帰宅し、急いで国に報告し終わると、その足でこの店に向かったのだ。店の場所は偶然にも甘党レスターが把握していた。

そこで嬉しい誤算が起きた。

彼女が一足先に店に来ていたのだ。

土産として渡した時の、喜ぶ顔が見れない事が少し残念にも思えたが、それよりも予想外に彼女に会えた喜びの気持ちの方が大きかった。

それに、こうやって向かい合わせで座っていると店で待ち合わせをして、合流したようにもとれる。

正直、甘い物は匂いからして苦手なのだが、たまにはこうゆうのも悪くはない。

目の前で美味しそうに食べている彼女に、先程購入したが、手をつける気にならなかったハニーフランをそつと差し出す。

彼女の顔が輝きながら嬉しそうに手を伸ばす。

★
☆

その後は、総指揮官と一緒にお店を出て屋敷まで帰った。

あれから屋敷での食後のデザートはハニーフランが出てくる。

最初の頃は、喜び興奮もしたけれど、

ごめんなさいー。

いくら総指揮官の好物とはいえ、私は正直、もうお腹いっぱいです。

だって！毎日なんですもの！
うえっぷ。

好物でも毎日食べていると拷問に感じてきます。
なんだか、こうも甘い物続きでこられると、たまにしょっぱいお煎餅とか食べたくなるのは私だけではないはずだ。

それから、アデルの家で産まれた子猫が一匹私の元にやってきた！
遠征から帰ってきた翌日、総指揮官が、無表情にかつ無言で子猫1匹の首根っこを捕まえながら、私に差し出してきた。どうやら私に内緒でアデルに了解を得て貰ってきたらしい。

しかし、総指揮官殿、そんな物を扱うような手つきで…。
猫、びっくりしてるから！生ものだから！もっと優しく！

しかし、総指揮官に首根っこを捕まえられたまま驚き、固まるその様子とか、かっ…可愛すぎる。

嬉しくて、可愛くて、そのまま抱きしめる。名前はどうしようか？
小さい子猫なので、

「名前は『チビ』なんてどうかな？」

と子猫に向かって聞いていたら、横からすかさず

「そのまますぎるのでは」

と鋭い一言が聞こえた。

：

そうゆうツツコミを入れる時は口を開くのですね、総指揮官殿。

閑話 総指揮官と名前と（前書き）

視点が

彼女↓総指揮官↓???

です。

閑話 総指揮官と名前と

総指揮官殿は、自室で机に向かい、なにやら書類に記入している。先程から同じ姿勢で、まっすぐ背筋を伸ばして机に向かい、黙々と業務をこなしている。

私は、その側の床に座り込み、先日もらってきたスウィイイトラブリーイイいな白い子猫を愛でている。

全身を撫でてやると気持ちよさそうにゴロゴロ喉をならしながらも、私の手にじゃれついてくる。

まだ子猫なので、力加減を知らないらしく、本気でじゃれてくるので結構地味に痛い。

私の手は小さい引っかきキズだらけ。

けど、やめない。

だって可愛いんだもの。この柔らかな手触りに、愛くるしい肉球。その柔らかくピンク色の肉球を思わず口に入れたくなる。

その欲求を押さえる事が出来ずに、肉球を口に入れていたら、総指揮官殿がこっちを見てた。あ、やばい。見られた。

「そういえば、この猫の名前はどーしましょうか？」

そうなのだ。まだ大事な名前をつけていないのだ。総指揮官殿に、慌てて尋ねる。

：肉球を口に入れていたのを誤魔化す作戦とも言っう。

総指揮官殿は、書類を記入する手を一時中断し、少し考えたように

宙を見つめた後、
力強い瞳で私を真っすぐに見つめると、

「クロアドリアナ・デアロンダ・ティーアロードⅡアウパンデスラ
ード・オーデアルドアラクダル」

長ッ！

なんですか、その長さ。

私が小学校の時、授業で『じゅげむじゅげむごごうのすりきれ…』と
暗記した記憶があるけれど、さすがにこの長さ、横文字の暗記は無
理だわ。

「…そっ…その名前の意味は…？」

名前の長さは問題外としても、その名前に込められた意味って結構
重大だと思う。

名前って、どんな風に育って欲しい…って、願いを込めるでしょう？

総指揮官殿は一言、

「英雄です」

「英雄？」

私がオウム返しに聞き返すと、

「100年程前に、我が国を救った英雄の名で、まだ小競り合いの多かった隣国諸国との戦闘では、彼の通った後は草木の一本も残らず、目を合わせた者は恐怖のあまり狂い、全てを灰と化すと言われた程の騎士であり、その反面味方には慈悲深く、敵に対してはひとにらみで部隊を壊滅させるほど天才的な力を持ち…」

何、ソレ！怖っえええええ！！

床に寝転がって、私の足に可愛くじゃれついてくる白い子猫に、血にまみれた凶暴な英雄と同じ名前をどうしてつけようか。

血の匂い、プンプンですがな！

たとえば味方には慈悲深かろうが絶対イヤだ！
将来的に、生首転がしてじゃれて遊ぶ猫こになったら、どうしてくれるの！

聞かなきゃよかった…。

そんな後悔の波が押し寄せる。

★
☆

彼女が猫に名前をつけたいと言う。

自分としては、考えた末に名誉ある名を提案してみる。

この名を授かれれば、どんな困難にもめげず、己の意志で逞しく生きていけるはずだ。

しかし、どうやら彼女も名を考えていたようなので、彼女の案も聞いてみる。

「えっと、この猫は白くて毛がふわふわと柔らかくてとっても可愛いらしいから思いついたのですが…」

彼女がためらいながらも意見を言う。

自分は彼女の意見をもっと聞きたいと思い、耳を傾ける。

「私のいた世界のある物から思いついたのですが…。そのある物も、白くてふわふわで、見ているだけで気分が楽しくなってくるんです。そして私も小さい頃から大好きな物なんです」

彼女は少し照れながらも、自分の意見を堂々と述べる。

そんな彼女が自分の目を見て、大好きだとはっきり断言する物に、興味が沸くのは当たり前だ。

その名を尋ねてみると、

「わたあめ、です」

「……………」

わたあめ……………か…………。

自分は聞いた事はないが、彼女の説明の様子から察すると、とても心が踊り、皆から人気がある物なのだろう。彼女の案どうり命名しようと思い、顔を上げると、

「とっても甘くて美味しい食べ物なんです！」

「……………」

★
☆
★

ぼくはねこ

名前はまだ…………

検討中！

総指揮官と名前と？

ぼくはねこ

名前はまだ、検討中なのだ。

★☆

ぼくを可愛がってくれるお姉ちゃんがぼくを抱っこする、頭をなでなでしてくれる、ヒモで遊んでくれる、そしてミルクをくれる。

そうして夜はずっと一緒にねてくれる。

…たまにぼくのお昼寝にも付き合ってくれるんだけどね。

一緒にねている時のお姉ちゃんの顔は、長いまつげを閉じてぐっすりと眠るんだ。

たまにひくひく動く鼻について引き寄せられて我慢できずに、じゃれついてしまう。

そうするとお姉ちゃんは飛び起きて、それからちょぴつと怒られる。…だって、動くんだもん。

触ってみたい衝動を、ぼくはまだ我慢出来ないんだ。

だけど、ちゃんとぼくは、その後に舌でなめてあげるんだ。フォロ―は忘れないつもりだよ。

だけど、そうするとお姉ちゃんは余計に眠りから目が覚めるみたい。ざらざらする感触らしいけど、ざらざらって何だ？

ぼくとしては、ペロツと鼻の頭をなめてるつもりだよ。

今日もお姉ちゃんがぼくと遊んでくれている。

日の当たる暖かい部屋で、お姉ちゃんがぼくを抱きしめて、白い毛並みの頭に顔をうずめてくる仕草がくすぐったい。

お姉ちゃんは、ぼくの頭に顔をうずめたり、頬ずりしたりするのが大好きらしく、いつも抱っこしてくれる。

ぼくもお姉ちゃんの、笑った顔や、僕を抱っこしてくれる優しい手に、抱っこしてくれた時にほのかに香る、お日様のような匂いが大好き。

★ ☆ ★

「ちょっと待っててね」

お姉ちゃんがぼくを置いて部屋から出て行く。

……

………きた。

きたきたきた、来たー！

今日もぼくの予感は的中する。

ぼくの側からお姉ちゃんがいなくなってしばらくすると、いつも決まって近づいてくるのが、そう、この部屋の主の総指揮官殿だ。

無言で椅子から立ち上がり、そのままぼくを見つめると、一直線に

ぼくを目がけて早足で向かって来る。

ぼくは身構えて、いつでも逃げれる体勢をとる。

総指揮官殿の威圧感を目の当たりにして、狙ったえものを捕獲するような鋭い視線を向けられたら、じりじり後退したい気持ちになるけど、ぼくだって負けないんだからなあー！

無言で僕を見ながら近づいて来る総指揮官殿に、正直おしっこちびりそう。

真っ直ぐに視線をむけられて、本当はしつぽを隠して逃げてしまいたい、そして叫びたい、『おねえちやああああん』

そうこうしているうちに、総指揮官殿がぼくに近づいてきて、いつの間にやら目の前に来て、ぼくに向かって言う。

「クロアドリアナ・デアロンダ・ティーアロードⅡアウパンデスロード・オーデアルドアラクダル」

…？

もしかして…それはぼくの名前なの？ぼくを呼んでるの？

首をかしげて返事に困っていると、総指揮官殿も少し考える素振りを見せた後、ポツリとつぶく様に別の名前で呼ばれる。

「…クロ」

それは、省略しすぎな気がするなあ…。

それにぼくは、白い毛なみなんだぞー。クロ色じゃないやい。
少しの反抗心でプイと横を向くと総指揮官殿が、いきなりぼくの頭を、わし掴みにする。

わっわっわ！急にびっくりする。

そうして、ぼくのあたまを撫でくりまわすけど、もうやめてよ。せっかくお姉ちゃんが優しくなでてくれて、今日もブローがきまっているのに、めちゃくちゃじゃないか！

総指揮官殿は、いつもこう。急に近づいてきて、がっしり掴んでから頭をゴイゴイなでる。

この人、ぼくに対する力加減が微妙にわかっていないと思う。
これでも手加減しているつもりなんだろうけど、お姉ちゃんの柔らかくて優しい手と違って、広くて大きくてごつごつした手でなでられて、痛くはないけど気持ちいいかと聞かれたら、そうではない。

しばらく、頭をなでまわされた後、総指揮官殿はクルリと後ろ姿を見せ、机に戻る。
ホッ、やっと解放された。

総指揮官殿は、さっそうと自分の机に戻り、何もなかったように書類に目を通す、お仕事のつづきだ。

いつもの事だけど、いったい何をしたいんだろうなあ、総指揮官殿。

そうこうしている間に、お姉ちゃんが戻ってくる気配を感じた！

ぼくは遠くから聞こえる足音に、すぐさま反応して扉の前まで走って行き、そのまま扉の前でお出迎え。

お姉ちゃんは、扉をあけてぼくを見るとほほ笑む。

あのね、あのね、お姉ちゃん。

お姉ちゃんが、いなくなった隙に、今日も総指揮官殿がね、ぼくのね、

「あ！少し目を離したら、またイタズラしてあばれたなー！毛なみがぐちゃぐちゃだよー！」

お姉ちゃんが笑いながらもぼくの頭を撫でってくれるけど、無実だよ！ぼくじゃないや！

ぼくは、頑張って訴えるけど、お姉ちゃんは聞き入れてくれない。そのまま抱っこして、また頭を撫でてくれる。

無実だけど、無実だけど…

こうやって、お姉ちゃんにまた頭をなでてもらえると、たまには頭をぐちゃぐちゃにされるのも悪くないかなあ、って少し思ってきてしまう。それに、なでられていると、何だか眠くなってきた。

総指揮官殿は机に向かったままお仕事をして、こっちを見ないけど、いつもより口端がほんの少し上にあがっているのを、ぼくは知っている。

私と客人

食堂のお昼は忙しい。そりゃ、稼ぎ時なもの。

私も働き始めの最初の頃は慣れなくて、お皿を落としたり、コップを割ってしまったりもしたけれど、最近では割と慣れてきたとも思う。

食堂のおじさんとおかみさんの作るご飯は、美味しくて安くてボリユームもあって皆が笑顔で食べている。

忙しい昼時でも、食べている人達のその顔を見るのが、結構好きだったりする。

やっぱり食べる事は、人間の基本だよな。

美味しいご飯を食べていると、それだけで機嫌も良くなるし笑顔にもなるし、何だか幸せ感じるよね。

そんな忙しい昼時が過ぎた頃、私はおかみさんの作ってくれた遅めのまかない昼食を取っていると、食堂の扉が開き、来客を告げるベルが店内に鳴り響く。

私は反射的に椅子から立ち上がると、お客様を出迎える為に扉から入ってきた人物へと近づく。

「いらっしやいませ」

扉を開けて食堂に入ってきたのは、男の人だった。

正直、ここの食堂に通ってくるお客さん達とは身なりや雰囲気はどこか違っていて、最初

『もしやお店間違ってる?』とさえ思った。

だってその男の人は、食堂に入ってくると、まず食堂全体をぐるり

と見渡して、あちこち観察している。
席に案内しようと声をかけてみたが、私の声など耳に入っていない
様子で観察に夢中になっている。

まいったなあ…。

下手すりゃ、私の存在すら認識していないのかも。
部屋の隅々まで観察しているお客様を前にして、私の存在を認識し
てもらえるまで、辛抱強くずっと待っていた。

このお客様は、この食堂に来る人達とは身にまとう空気が違ってい
た。

服装は、薄手のコートを羽織っていて、皮のブーツを履いているが、
そのスタイルはどこか上品だ。

『…一般的にかっこいい人…なのかも…』

食堂を観察している間、私もお客様を観察していた。
本来なら、失礼なんだろうけど、思わず見とれてしまった。

茶色のサラサラした髪に、薄い青い色の大きめの瞳で店内を興味深
そうに観察している。

鼻筋は高く、薄めの唇からは知的な感じがして、年の頃は、二十代
前半かもしれない。

しかし、ここまで、この食堂を観察するとは何故だろう。

もしや同業者でライバル店潜入か？

しかし、それは違うと思う。どこことなく上品な気品漂うお客様に、
それはないと自分の中で否定する。

しばらくすると、男の人の店内観察から、私に視線がうつる。
あ、良かった、やっと認識してもらえた。

「いらっしゃいませ！」

「……………」

笑顔で案内しようとするも、お客様は私の顔を見たまま動かない。
今度は食堂から私へと観察対象が変わったのだろうか。

薄い青い瞳の視線を興味深そうに向けてくるので、私はどうしていいのか、いたたまれない。

困っていると、

「…ああ！失礼！」

お客様がほほ笑みながら、返事をしてくれたので、ホッとする。

そうして、席に案内して腰をかけて貰うけど、まだ食堂内を見渡して観察していた。

いったい何がそんなに珍しいのだろう。

★☆

お水とメニューを持って行くと、そのお客様は優しく微笑みながらメニューを受け取る。

薄い青い瞳を細めて私に質問してくる。

「この店のお勧めを教えてくださいるかな？」

「はい、今日は、森のきのこがたっぷり入ったスープに、今朝とれたてのジメーニの魚をムニエルにして、ホワイトバースのソースで

頂くのがお勧めです」

おかみさんとおじさんの作る料理は、どれも美味しいけど、今日のお魚は本当に美味しかったので、自信を持ってお勧めする。
ジメーニの魚は今が旬らしく、脂がのっていてプリプリだ。

「…じゃあ、それにしよう」

「はい、かしこまりました」

お客様は私のお勧めのまま、オーダーを決めると長い足を組み、ふわりと優しく微笑んだ。



オーダーの品物全部出し終えて、しばらくすると、先程のお客様から呼び出された。

何だろう、もしかしてお口に合わなかったのかな？

ドキドキしながらも、テーブルに近付くと、お皿の中味は全て綺麗に空になっていたのです。まずは安心する。

お客様は綺麗に整った顔に優しく笑みを浮かべながら、

「美味しかったよ」

「ありがとうございます」

私も自分が褒められたかのように嬉しくなる。

「それで、次は食後のデザートを頼みたいのだけど、お勧めはある

「？」

「またもや聞いて来るお客様に、私の頭の中はデザートのおんパレード。」

「今日のデザートは、完熟採れたて果物で作ったゼリーもあったし、パナットクリームのムースもあったし…。」

「それでも私のお勧めは…」

「パイですね！」

「私はこれまた自信を持ってお勧めする。」

「今日食堂についた時、ちょうどおかみさんが、パイを焼いていて香ばしい匂いが店内に充満していたのだ。」

「あの匂いをかいで、食べたくならない人がどこにいらっしゃいますか。」

「甘い物好きの私には、たまらない。」

「クリームチーズの酸味とパナットのジャムの素晴らしきハーモニーよ。」

「私の力説に、お客様はクスリと笑うと、」

「じゃあ、それを2つー」

「2つですか？」

「そう、よろしくね」

「お客様は、2つも食べるなんて、余程甘い物が好きらしい。」

「けれど、その気持ちわかるぞ、私だって三食甘い物でもオツケーだもの。」

「お客様に、どこか同じモノを感じながらもパイを二つ注文した。」

★☆

「お待たせしました、クリームパナットパイです」

サクサクの生地は、おかみさんの自信作です！

絶妙な甘さで、ほった落っちでも知りませんよ、と心の中で思いながらも、お皿を二つ、お客様の前に置く。

お客様は、『ありがとう』と言った後、嬉しそうに笑った。

その笑顔が素敵で、少しドキツとした。

接客業をしていると、当り前の事をしただけでも、たまにお客様にお礼を言われる事がある。そしてお礼を言われるとやはり嬉しくて、単純に『頑張ろう』って思える。精一杯の誠意と笑顔で返そうと思う。働く上で、その気持ち大事だと思う。

お客様は、パイの入った皿を自分の向かいの空いてる席に一つ置くと、

「これは、君の分」

そう言って、席に座って食べるように促した。

「え…？」

あっけにとられてる私と、にこにこ笑うお客様。デザートを二つ頼んだのって、こういう意味だったのだと遅い頭でやっと理解する。

「いえ…！ いけません」

「なんで？」

「だって…そんな…」

見ず知らずのお客様にごちそうになる訳には…。

けれど、はっきりと言えなくて口ごもってしまう。ああ、日本人。お客様は、そんな私の様子を見て困ったように苦笑してから、そつと小声で、

「男の自分が甘いのを一人で食べるのが恥ずかしくて…ね」

そうなのか。

「だから協力して欲しいんだよ…ね」

そんな整った顔をして、首を少し傾げながらほほ笑み、まるでお願いされるように見つめられて、困惑して照れもあり、直視出来ない。

どうしたもんかと考えながらも、パイとおお客様の顔を交互に見て、私の心が揺らぐ。

困った…。仕事中だし…。けど、お客様の頼みだし…。それに…

パイ、美味しそうだよ、パイ。



「美味しい？」

食べる前におかみさんに、すぐるような視線を送ったら、おかみさんは目でサインを送ってきた。
食べちゃいな、というゴーサインを受け取り、席についてパイを口に入れたって訳。

お客様は、にこにこ勝利の笑みを浮かべながら、パイを食べる私を見ている。

「はい、美味しいです」

「そう良かった。では、頂くでしょうか」

私が食べるのを見つめながら、自分もパイを口に入れる。

その甘い笑顔に、整った顔立ちに、嫌味にならないその振る舞いだった。

このお客様、相当な使い手と見た。

相当もてるだろう。

それこそ、新手のナンパ？

そんな考えが一瞬、頭をよぎったが、それならそんな甘い手に引かかる訳にはいかない。

多少の警戒心を出しながらも、向かいに座ってパイを口に入れた。
甘いのはパイだけで十分だ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5849t/>

総指揮官と私の事情

2012年1月14日22時58分発行